

私学の魂

巣鴨中学校・高等学校

今夏「WLSA (World Leading Schools Association)」へ加盟。 ユニークな“硬教育”の伝統を守りつつも 最先端のグローバル教育プログラムを導入し、 21世紀に生きる力を育てる男子進学校!

2017年から「巣鴨サマースクール (SSS)」という、国内に居ながら世界最先端の国際教育体験ができるプログラムを導入し、海外留学やサマースクールへの参加者を年々増やしている巣鴨中学校・高等学校。日本の男子進学校のなかでも、急速にグローバル教育先進校になりつつある同校は、この夏、英イートン校などを中心に世界の中等教育をリードする学校のネットワーク「WLSA」に加盟を果たしました。2007 (平成 19) 年から理事長・校長を務め、2012 (平成 24) 年から2016 (平成 28) 年にかけての新校舎工事を完成させ、全棟使用開始までの大きな節目を経て、現在までの生徒の成長を見守ってきた堀内不二夫先生と、国際教育部部長の岡田英雅先生、教務課国際教育担当の山崎大輔先生、入試広報部部長の大山聡先生に今回はお話を伺いました。



第五代校長の堀内不二夫先生

DATA 1

巣鴨中学校・高等学校

- 沿革
- 1910 (明治 43) 年 創立者・遠藤隆吉先生、私塾「集園学舎」を創設。
 - 1922 (大正 11) 年 当時の近代建築の粋を集めた本館が竣工。巣鴨中学校創立。
 - 1945 (昭和 20) 年 東京大空襲による学校施設焼失・復旧開始。
 - 1956 (昭和 31) 年 学校法人名を集園学舎から巣鴨学園に変更。第四代校長・堀内政三先生就任。
 - 2007 (平成 19) 年 第五代校長・堀内不二夫先生就任。
 - 2012 (平成 24) 年 新校舎建設工事開始。
 - 2013 (平成 25) 年 西新校舎 (5 階建て教室棟・講堂) および新ギムナシオン (体育館) が同時竣工。
 - 2014 (平成 26) 年 南新校舎 (4 階建て教室棟) が竣工。
 - 2015 (平成 27) 年 中央新校舎 (6 階建て教室棟) および北新校舎 (5 階建て特別教室棟・図書館) が同時竣工。
 - 2016 (平成 28) 年 新校舎、全棟使用開始。
 - 2017 (平成 29) 年 巣鴨サマースクール (SSS) 開講。
 - 2020 (令和 02) 年 World Leading Schools Association (WLSA) に日本初の加盟。

校長 堀内 不二夫

所在地 〒170-0012 東京都豊島区上池袋 1-21-1
TEL : 03-3918-5311 (代表)
<https://www.sugamo.ed.jp/>

交通 JR 山手線「大塚駅」北口から徒歩 10 分。JR 山手線ほか「池袋駅」東口から徒歩 15 分。JR 埼京線「板橋駅」東口から徒歩 15 分。都電「巣鴨新田駅」から徒歩 8 分。東武東上線「北池袋駅」から徒歩 10 分。ほか東京メトロ・都営地下鉄の最寄り駅から徒歩 15 分。都バス便あり。

硬教育 = 努力主義は変わらずとも すべては生徒の未来のために、 次の100年へと“進化”する！

現キャンパスの校舎・施設を一斉に（1987年竣工の東校舎を除いて）建て直すための新校舎建設工事が開始されたのが2012（平成24）年。そのため、中学校は空き校舎となっていた北区内の公立小学校に2年間移転。その後、順次竣工した新校舎に中学生が戻り、2016（平成28）年から新校舎の全棟の使用が開始され、伝統ある巣鴨中学校・巣鴨高等学校のキャンパスのリニューアルが完成しました。

「このキャンパスで6学年全員が学校生活を送りながら、順次新校舎の建築を進めていくという案も当初はあったのですが、やはり生徒、とくに中学生の安全確保のために、中学を一時移転するという対策を取りました。はじめは統廃合になった北区の公立中学校校舎への移転を考えたのですが、これが事情でかなわず、公立小学校への一時移転という形になりました。

この間も、教員が両キャンパスを行き来して中高の連携を工夫してきたのですが、やはり物理的に中高の場所が離れていた時期には、正直なところマイナス面もあったと思います」と、2007（平成19）年から五代校長を務める堀内不二夫先生は当時を振り返ります。

以前の重厚な校舎デザインを一部残し、伐採せざるを得なかった校地内の大木を木材として生かすなど昔を知る人には懐かしい趣を残しつつ、新たな学び舎に生まれ変わった巣鴨中学校・高等学校は、21世紀を生きる生徒たちの“新たな学び”の環境へと生まれ変わり、次世代を担う男子教育の新たなステージへと踏



世界有数の中等教育の名門校・英イートン校でのサマースクールには約40名が参加するという。

み出しました。

「本校が謳ってきた『硬教育』という言葉と教育理念は、日本で唯一で、本校の創立者が創った言葉ですので、これを変えるわけにはいきません。ただ、意味が伝わりにくいので、最近では『努力主義』と説明しています。硬教育というと、厳しいとか古臭いと思われるような時期もありました。峠を越えたり、海で泳いだり、冬はマラソンや柔剣道の寒稽古をしったりしていますからね。しかし最近ではかえって硬教育の本質を理解して、好感を寄せてくれる保護者が増えてきたように思います。ひと頃のスパルタ教育と同一視された誤解が解けてきたのかもしれない（笑）」と堀内先生は、保護者の感じ方の変化を伝えてくれました。

その変わらぬ『硬教育』を実践する巣鴨中高が、この数年間で、国際教育のプログラムを急速に進化させ、中高一貫の男子校のなかでも際立つ存在となっています。

「とくに中学校における新たな国際教育の体験プログラムが加わりました」と、堀内先生。

その改革と進化のコンセプトは、同校の学校案内の冒頭に「変わらずに、変えていく。すべては生徒の未来のために。」と謳われ、「巣鴨精神を受け継ぎながら、次の100年へ。」と宣言されています。

2017年に破格のグローバル体験プログラム「巣鴨サマースクール（SSS）」を新設し、今年7月に「World Leading Schools Association（WLSA）」に日本初の加盟を果たした巣鴨中高の動きは、日本の男子進学校のなかでも、本格的なグローバル教育先進校になりつつあることを象徴しています。

「実は国際教育は創立の当初から意識されていました。現在は使っていませんが、もともとの巣鴨学園の校歌の三番には、『西方ベルリン東方巣鴨』という一節があり、欧米文化の象徴としてのベルリンと、東京の一私学である本校の存在を並べて、世界に開かれた教育を行う気概を持っていたのです。また、創立者が朝鮮の生徒を通信教育のような形で面倒を見て、後に韓国で要職についたその生徒からお礼が伝えられ、韓国のテレビ局が取材に来たというエピソードも残っています。戦時のため海外交流も一時途絶えてしまいましたが、終戦から間もなく、私が本校に在学していた50数年前にも、アメリカに1年留学した先輩がいました」と堀内先生。

イギリスの名門パブリックスクールとの交流も、日本の私立中高のなかではいち早く行ってきた歴史を持っています。

「1991（平成3）年にイギリスの名門イートン校とハロー校が共同でデリゲーションを組んで東京に来て、首都圏の学校を視察したことがあったのですが、



アクティビティ（芸術・スポーツ）は息抜きではない。毎日2時間、講師も生徒も本気で取り組む！

そのときに東京の学校のひとつとして選んだのが本校でした。その後、本校ではなくイートン校から交流の申し入れがあり、イートン校に留学生を送るなどの交流が始まったのですが、後で聞いた話では、『イートン校の校風に本校がいちばん近く感じられたから』だそうです」と堀内先生は笑顔で教えてくださいました。

伝統を持つ世界の男子校が受け継ぎ、 巣鴨中高の「硬教育」も同様にめざす ノブレスオブリージュの精神

「創立当初から『硬教育』を謳ってきた本校は、最近の日本の私立中高のなかでは、やや厳しいとか古臭いと感じられる面があるかもしれませんが、イートン校やハロー校といった500年の歴史を持つ名門男子パブリックスクールの教育には、もっと厳しい面や伝統重視の面があります。その点で本校は、こうした学校と似た面があると思いますし、先方からもそう思われていたようです。世界的に見ても、男子校の教育にはそうした面も必要なのではないでしょうか」と堀内先生。

確かに、将来の各界をリードし、自国を支えるエリートを輩出してきた英国のパブリックスクールでは、「noblesse oblige（ノブレスオブリージュ＝高貴な者には義務が伴う）」という理念に基づく教育が、いまも脈々と受け継がれているのでしょう。

そしてこの数年、巣鴨中高では、男子が世界に目をむける気づきやきっかけになる、先進的な国際教育のプログラムが実践され、その成果が目撃されています。

「本校で行われている海外研修、短期留学やグローバル教育のプログラムには、毎年約150名が、何らかの形で参加しています。これは男子の進学校ではか

なり多い比率ではないでしょうか」と、国際教育部部長の岡田英雅先生は言います。

たとえば昨年は、イートン校での研修に約40名、オーストラリアに22名、マレーシアのヘンリー8世校に5～6名、ターム留学には9名、そのほかの短期留学なども合わせると、海外へ出ていく生徒が約100名、国内でも蓼科で行う巣鴨サマースクール（SSS）に約50名が参加しているといえます。

「イートン校との交流も、いままではあまり外部に紹介していなかったのです。別に隠していたわけではありませんが、当たり前のように行ってきたので、とくに紹介するまでもないと思っていたのですが、やはり発信しなければ伝わらないだろうと…」と堀内先生。

海外を意識し、世界の名門イートン校との交流も行っている学校であることを広く内外に伝えるために、英文のリーフレットも作成しました。このリーフレットには、イートン校との交流の写真や、伝統的な巣鴨中高の校舎や行事の写真が、コントラストも鮮やかに掲載されています。

「この英文でのリーフレットに掲載している巣鴨中高の教育の紹介文を英訳するにあたっては、やや苦労しました」と岡田先生。やはり「硬教育」の概念は直訳することが難しく、その点が最も苦労したそうです。

「創立期の本校校舎と日本地図がある『SUGAMO GAKUEN HISTORY』のページの英文のなかに『硬教育』＝『努力主義』を『integrity and perseverance』と紹介しています。誠実さや、どうい状況にあっても自分が正しいと考えることをやり通す、素直さを表したのですが、それでもニュアンスをそのままひとりで伝えるのは難しいですね…。ただ、本校に務めるオックスフォードの博士号を持つカナダ人の先生にも相談したところ、この言葉が近いのでは



巣鴨中高の教育を英イートン校と対比させたイメージで表した英文のリーフレット。「硬教育」の意味を伝えるのが難しかったという。

という意見をいただきました」と岡田先生。

「もともと言葉を外国語に訳すことは難しいものですが、とくに『硬教育』は、本校の創立者が創った言葉です。よけいに難しいと思います。明治期には西洋から入ってきた『軟教育』という概念があったので、それと対比する意味もあったようです。当時は内村鑑三や新渡戸稲造も創立者と同じような意味のことを書き残しています。洋の東西を問わず、次世代を担う青年を育てる教育に必要なことは共通する部分もあったのではないのでしょうか」と堀内先生は、巣鴨中高が掲げる「硬教育」の由来を話してくれました。

若者の前途は常に洋々。 まず小舟でも大海に漕ぎ出すことで、 世界への目が開かれ、心に火がつく！

「校長はよく、学校説明会などで『若者の前途は洋々。でも小さな舟であっても海に漕ぎ出さなければ、前途洋々といえないのでは…』という意味の話をしています。その意味で、入学して『巣鴨サマースクール (SSS)』など何らかの国際教育のプログラムに参加した生徒は、小舟で漕ぎ出したこととなります。そこで、豊かな人格の教養あふれるイギリス人の講師や文化と触れ合うことで、世界に目が向けられ、世界には面白い人たちがたくさんいるのだなと興味が湧きます。そして翌年にイートンに行ってみようと思うようになる。彼らが心の中で世界という大海を意識するようになってきたことが、そうした海外プログラムの参加者が増えている理由だと思います」と岡田先生は話しています。

「本校は希望の大学進学をかなえることを大切な目標のひとつにしていますが、校長がいつも生徒に言うように、何も大学入試がゴールではありません。その先にあるものを彼らが見て、自らいろいろなことに挑戦してみようという気持ちが起こる。彼らの心の中に、感受性に、そうした“火をつける”ことが、教育の最大の目的だと思っています。そういう意味では、いまはわが子を大事にし過ぎて、『子どもを小舟に乗せないのは大人』という状態になっている面もありますね。」と岡田先生。

「まず漕ぎ出してみなければ、対岸にたどり着くこともないわけですね」と堀内先生も強調します。

「ですので、校長はよく生徒に向かって『太平洋の上で飯を食え』と言っています。すぐには意味を理解してもらえないのですが…」と岡田先生は苦笑します。

しかし、いまの巣鴨中高の進化ぶりを見ると、堀内

先生の名言と様々なグローバル体験プログラムが、生徒の心に灯をつけていることは間違いなさそうです。

「いまはグローバルモビリティ（国際的な人的交流）の時代でもあります。だからこそ、生徒には海に漕ぎ出してほしい。これから見ていく世界は日本だけでなくいいのだよと…。ただし、一方では、自分の生まれた日本の文化を忘れて根無し草になっては困ります。その意味では英語が話せるかどうかは実はさほど問題ではなく、母国を知る人間としてしっかり生きることが国際教育の原点です」と岡田先生は考えています。

そういう意味でも、巣鴨中高の様々な教育体験から、日本の文化や伝統について語れることを、巣鴨の生徒は多く身につけることができそうです。

「本校の『硬教育』の根幹は、日本の文化体験も含めた、様々な意味での『修業的体験』にあります。ですから、巣鴨名物ともいえる『大菩薩峠越え』や『巣鴨流水泳学校』『早朝寒稽古』は現在も行なわれています。こうした修業的体験は、これからも本校の教育で変わることのないものです」と堀内先生は強調します。

「男子校なのに茶室を持っているのも、そういう体験をさせたいからです。実際に茶器に触って、お茶を飲んでみる。そういう所作を、中高生のうちに一度でも体験させたいのです。知識ではなく知性を育てるために、本物に触れることで、そのベースを身に付けてほしいのです」と堀内先生は、巣鴨中高の“修業的体験”に寄せる想いを伝えてくれました。

自発的なコミュニケーションのために 心を開き、考え方や行動が変わる そうした「良い種」をまく貴重な体験を！

そうした伝統の修業的体験を大切にしつつ、近年の



深夜から翌日の朝にかけて、大菩薩峠を全生徒で越えていく名物行事。以前より距離は短縮されたが、頂上に着いたときの達成感がたまらないという。

巣鴨中高の教育のグローバル化の大きなきっかけになった「巣鴨サマースクール（SSS）」のような国際教育のプログラムが、「生徒の心に情熱の火をつける」新たな修業的体験として巣鴨の教育に加わりました。

2017年から始められ、昨年で3回目を迎えた「巣鴨サマースクール（SSS）」とは、イギリスの政府や建築・広告・教育などの業界で要職につくトップエリートが講師として来日し、希望制で参加した生徒50名と白樺高原に集い、5泊6日を過ごすダイナミックなグローバル体験プログラム。スポーツやアートのアクティビティーや、日本文化のプレゼンテーション、各講師のキャリアや得意分野を生かした授業を通して、世界トップレベルのエリートとコミュニケーションするなかで、生徒の心に情熱の火がつけられる貴重な体験です。

「この『巣鴨サマースクール（SSS）』の目的を伝えるときには、『良き種をまく』という表現をしています。貴重な体験を通して、生徒が自発的にコミュニケーションをしようと心を開き、考え方や行動が変わる『マインドセット』——それが「SSS」の目的です。生徒の心に種がまかれてさえいれば、適当な時期に光と水が与えられ、必ず芽が出ます。大事なのは『良い



1956（昭和31）年から2006（平成18）年までの50年間校長を務め、巣鴨学園の中興の祖とも言われる第四代校長・堀内政三先生の銅像。



剣道・柔道の2種目があり、冬の6日間、始業前から稽古が始まる。この寒稽古に臨んでから大学入試に向かう高3生も毎年いるという。

種』であることです」と岡田先生は言います。

この「SSS」が始まってから、そのほかの「海外体験学習制度」にも参加する生徒が目立って増加しました。世界屈指の名門・英国イートン校で英語と文化を学ぶ3週間の「イートン校サマースクール」や、イギリス・オーストラリア・カナダ留学など「世界につながる海へ漕ぎ出す」生徒が目立って増えてきたといえます。

そうしたイートン校との交流実績や、「SSS」で広がった教員間の人脈と、巣鴨中高への海外校からの評価、それらがつながることで、今春7月には、世界各地で次代を担うトップエリートを育てる学校間のネットワーク「World Leading Schools Association (WLSA)」に日本初の加盟を果たしました。

「WLSAとは、もともと英パブリックスクールが中心になって立ち上げた組織で、新たに加盟するには50数校の加盟校のうち2校からの推薦が必要です。幸い本校には、これまでのイートン校やハロー校との交流実績があったことがプラスになり、最終的には両校の校長先生から推薦をいただきました」と岡田先生。

「加盟が認められた経緯を話すと長くなるのですが、これまでの本校の海外交流の実績と、日本の学校のなかでも際立って個性的な『硬教育』という教育スタイルへの関心、そして様々なご縁による幹事校の先生方から得られた本校への評価が重なって、そこにタイミングや運も加わり、今夏からの加盟が決定しました。

加盟が認められるのは、なかなか簡単なことではありませんでしたが、昨年は教育者の世界大会にパネリストの一人として参加させていただくなど、私自身も

教員として貴重な体験をさせてもらい、また各国の熱心な先生方と出会うことで目が開かれました。『もっと勉強しなければ…』という思いも新たにしました」と岡田先生は、加盟までの経緯を話してくれました。

「意外だったエピソードとしては、いま世界で中等教育を行う名門校では、総じて携帯（スマートフォン）の過剰な使用が勉強の障害になっているという共通の悩みが提示されるなかで、『本校は携帯禁止です』と言うと、会場がざわめき、その後の会食・懇談の席でもそのことに多くの参加者から質問が寄せられたことです。日本国内では厳しいとか遅れていると思われるかと思われてきたことが、世界ではある意味で“最先端”になってしまいました（笑）」と岡田先生は笑います。

「コロナ禍の現在、まだ本格的な交流は始まっていませんが、after コロナになったときには、教育者の世界大会や生徒による世界大会にも参加したいと思っていますし、9月以降には、『CCLP(クロスカルチャーリーダーシッププログラム)』と呼ばれるオンラインの交流プログラムにも生徒を参加させたいと思っています。それらによって本校の生徒のダイナミックな“グローバルモビリティ”が始まると、いまから楽しみにしています」と、一連のグローバル教育プログラムの導入をリードしてきた岡田先生は笑顔で話してくれました。

「その“グローバルモビリティ”の獲得にあたって、そのためにいちばん大切な能力は、コラボレーション（＝協働）力なのですね。どのような環境であっても、協力して課題を解決していくための最適解を、仲間と話し合って導き出していく。そういう姿勢を支える人間性や精神性も求められます。そのときに、巣鴨中高での“修業的体験”が生きてくると思います」と岡田先生。

変わらずに、変えていく。 生徒が生きる未来のために 巣鴨精神を受け継ぎ、次の100年へ。

新校舎工事もすべて完了し、恵まれた教育環境を整えた巣鴨中高に、新たに加わった国際教育プログラムと、世界の中等教育をリードする学校が集い、次世代の教育を考えていく「WLSA」への加盟。伝統を大切に男子進学校である同校が、いま急速な“進化”の節目を迎えています。

「最初は『巣鴨サマースクール』もすぐに実現できるとは思いませんでしたが、岡田先生を中心に、柔軟かつスピーディーに動くことができました。生徒のた



堀内校長先生とご一緒に今回の取材に応じてくれた、(向かって左から)教務課国際教育ご担当の山崎大輔先生、入試広報部部長の大山聡先生、国際教育部部長の岡田英雅先生。

めに良いと思えることはすぐに校長が決断して許可することは本校の強みでもあると思います」と入試広報部部長の大山聡先生。

「昨年4月からは、新中学1年生は全員ノートPCを持たせることも決まりました。このコロナ禍の休校期間にも、急遽、全教室分と全教員分のノートPC『サーフェス・プロ』を購入し、オンラインで生徒とやり取りする体制を整えました。やると決めたら早いのも本校の特徴のひとつだと思います」と教務課国際教育ご担当の山崎大輔先生も言います。

2019年入試からは、算数1科目による「算数選抜」も新設し、その手応えも十分に感じているという巣鴨中学校。

「算数選抜は導入して良かったですね。力のある生徒が入学してきてくれました」と堀内先生。

「算数選抜の入学者のなかには、中1で『高校の数学』コンテストで満点をとった生徒もいます。今後の成長が楽しみです」と岡田先生。

「しかし、本校はいまでも伝統の『全教科主義』を貫いています。大学入試の対策を効率的に行うための文理分けも、本当の意味では生徒のプラスにならないと考え、なくした方が良くと思っています」と堀内先生は考えています。

こうした巣鴨中高の「硬教育（＝努力主義）」へのこだわりと、最先端の国際教育プログラム。「変わらずに、変えていく。すべては生徒の未来のために。」と謳い、その両方を併せ持つ伝統の男子進学校が、今後どう“進化”の過程を辿るのか、目が離せなくなってきました。